



^{をきりか}
^{みや}
^が
 海宮おはるし
 下

中村俊定文庫
 文庫 18
 1045
 2

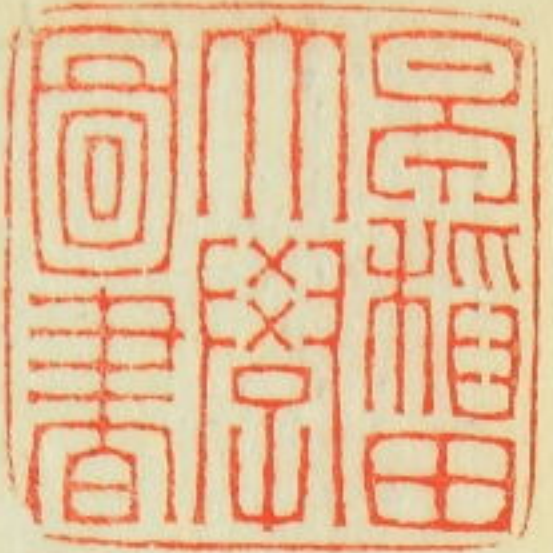




じりち

に
か
ん
し
ん
し
ん

や
あ
は
ら



天元人息之辨



折人月の生屋ノ血色トハ大事者ヲ以テ
なるゆと現る小面色も是ノ現る血の色也
て當付の大事と知るは是の爲んや
ままた今く人乃出入の息より起るんや
出入の息ハ天地根元の守り一昼夜小一万三
千五百息ト云ふ今ハ一命乃えと云ふ
生ある物皆日夜若細のやむを地べこの也

小夫乃精意と様一溜色の字と變て天の
 順乎小をそのま石精まづくに肉中と巡行と
 け時面をそのま足小うも紙ひく血色と名付く
 血色して大車を起るといつてお小いさく出
 入乃身より起りて大驚となる變之されば息
 小つらうかげん五てちのり起ると息天地根
 えの音飛の方物乃苦悩一いつる亦そののふ
 ころりあうう今夫の清濁を思くほくく分け
 どもこまへに争へた何うそりば唯字なる極え

神字のうごうざる亦とちのりと信のゆ圓小也
 と然たなくば言貴人乃お小土民の來がう
 神法ももろく乃ふ淨をふれくろもろく
 乃ふ淨をふれどさればあがらうまげれを求め
 ん若を即言の五付はるある息の中にかる
 一み乃守我列時却白熱乃血色面部一小
 何ううごの義小つさ我をすすぶと彼
 を恨む時長何くふすがに物を害一人を
 がいさる邪の強息天地小ひらめぬあるが故小

其の身を交刺し入るや忽ち心臓を
 執りし神主使突となりて身を去り
 始ハガシの傍りまゝの息を引交し
 長して忽ち天下の動乱と成る痛ま
 むんづけ怪ひも又くれどくさるあ
 ごとくは幸と物と火中今くそ
 べしよと目らるる守りあはれ毒
 小つる水又曰大唐の言山乃頂
 と小物を使く大海をなすくつあ

向て蘇生通じまじ筋ふ蘇の
 中乃邪字を志す
 是の國之様家ゆりくの生物異
 死骨乃難字風ふさそ色何
 即竹小血色乃移を引交し
 ん事恐るること割へれん
 病も邪法病も邪と生く病性乃苦悩小



是風通の

まうせ入る難き血色の様とるん唯天空の邪
 尊小おそのまきま本病る快きうく本牙を失ふ
 幸まきうくうげふ後衣け血ま乃本源を備小
 信心方後幸い主付強小何う死を逃れて富
 貴園満長久安全本意を堂小交けん幸
 勢くうくうぐひの心我起りくうん
 依神社宝お佛前清浄神拜佛礼く奇特
 へそ神仏小歩を運び家必社を強うま
 う也ま神佛まきたに象象く来りむつてワガ
 教

望と初ひたときむふとくも信乃乃頭様と
 八別神佛乃西前小玉く唯信心計深相する時ハ
 神佛一体の境界之是何ぞ隔るんや志うれバ
 同字合後して亦小神字霊妙と我ら小おもハ
 どもう海く死とま後邪ん亡念の起りまであ
 こま才小佛霊神字のさうのり一統バ神地う
 うひり一珠小信心おさるまど死と之是別ま
 子息出入の血色之面部子是れ血色かくのごくに
 五時六時を神仏を能神と去るまどま
 身

一生堅固なりとせんといふは乃て天地の
人倫本竹禽獸虫魚不有るを思ふんは
もつせんといふも然るも中の人身は
血をたなへるこふ

井のふらぬかまのさうせぬまづれは
けふのち我よりく吟どきくす
出息ふらる入息はつらび出息
かんぐくべしこふ

息災の二字は清れおかしあざうたんの
新とんはうの

一令神の冥加い令なり刻令の金曜星
く日用便算之金の文字人むりふ
と書くあ協と鳥をうけてん
世の中小形は人の守護を
然し令を多湯満くま令を
居るを令のあをとり
や令があをほあといふ
は是あらしらあは
天の令星より下しむありの

書のおまればも切刻とるくしんむべしとてお扱
ふと却る空かをそんぞ罪乃何なるその之恐き懐
海く守るべし世にた力かたあはれおまに能く切系
やうふと計親念しておとるふらるる後能く如
るものうらそ恐りし思ひ入るん念しておふて
おぐくえう切るべし切小持る程おまきうむ
おまれば程もかろるおど恐ろしく自然と恐るおを
お何げある社名細くひらき高き人部く
おのぞくしけふおトドリくしおお物く今を

性根さくゆるおまれば天の金星金神と玉扱せり
金の字乃二惑そくとんを射深くかんとくし織り
け道具はひくおろ命をそとるそ命あべし危丁小刀
あれし目ト或日神へ十二銅を掲げれ燈籠といふ
まの燈いふ一文りげても四方山ろ影ひをいつとを
くまふれば燈籠と影あが地とよふらん影を尋らふ
金が惜しいうらの十二銅をくし総が金の或地を
大事なりと世せし又高貴人の位けりてんをの
おろく下らるるお錢をかくるがうしと

なること成せば今に陽に照るは刻もつけぬ新なる
ありてその金をけつり切らり金の火を焚きたら
くく火を焚き消し去る水を焚ておろし
水の火を焚くはかきりのかきりにあがる
小の火と一旦の火いろましく小の火をそむきその儘
了る熱を焚くはかきりの火と相剋なり
と及程目よりかきりの火と土金水を生ずる物
おろしそくぞくせんをかりつゝ又後述くお生
とありては新又新別延命富貴如意の
二

儂小成終なりはるがら今も終る終るは平
生かくれどくにお生るは凡天地の内小者幸乃
分い成終せばといふゆゑ一はお生と成終る
夫天小金星巡りけ地小五示の金もわたり
り地と金星の妙用を降して引おろしたる
引つぎめぐるは時小成が又性お生しては時八天の
わくく成るる生れの儘乃又性成り地と天の金
星同章お承るこれ小の玉子理何うされを
きくしてはむう近江の金地さけく
水

とありまき土吹河げおろそ後河ほり宿土山紫
 またすくろ小みり山生ほり下儀のほあれも道
 現るくろもそのふしそ及まがりの三上山宿初
 かわしの相あれども吹初土砂ろみりそのされ小お
 げさるる産小砂りそ強まら大山とぬりそ今小
 何り天乃金星巡り何そゆら及程まそかくれど
 砂りの四星もましく小皆後くありそ何そ行ハ
 るく及程け金星小お月ド天ハあそそをすけ
 月が月地ふり相ハ受けおお続するが月と

今乃そ介徳乃生を物まそそあるハ木火土金水
 あれハ元天地何根乃及程をひく何そとあり
 色ども廿八宿星ハ夜く天のま中小かり各
 我ホがなほも知く及の絲入命が何そやそそ救
 小ありそ宿一守り月が及小廿八宿星ハ
 多づく曆の何月とそま初小強中強
 あれ空加中乃程えされバ強まらんをゆと強
 る何ハ腹中又性中お生そて天より順
 乃強を降し与へ又強氣ハまらそを一ハ小

らげむ時つづくともぬく意空より事なるもの
 何うて揺るがぬやうとむじりより鳥持まど
 かやうのため一敷多き魚をたたくが我らより
 又獲をあらり終ふらぶ身より死を削るお
 勉ろ恐れまゝ必あらさしおお刺し調休より
 有りあらぬを死生命小なりとぞつら
 魚を捨去といふ事ので死ぬといふとあけれ
 ば冥加を能くつさす人知るべしとふ
 刺しつあらびでさむらかぬ小籠を小巻て飽さふら

一或夥小生れのみくろ大無人をらり四五才小して
 只親をあらむむ目ざし合らるく小して人
 恐れまうはげさりをちりあさし目と眼と
 増長してさぬくろ恐ろしき雲をまきむじり
 せろつひのふ能くはる月をまき結て已小
 十六葉にぞありありお親らどめつひ化のく藤
 おそろくと限らましむ付に結として朝日をな
 がめ居らりし小何はともさく虚空より小虫一
 ひき飛まうて彼大無人のま眼をちりく

うして新方おらば飛りたり即ち痛くも
しく又辨もつけたるごとくやアといふら
ましく二三年眼を病り終るも眼潰れて
刃くばまより親より新種をうけ籠つ念佛
三昧入るも全快なりほほい辨也新ら療治
お小お慈る身体をあげて親子食ら幸もあ
いどわりて強ふは老療治をおいて是をたづ
として親子三人らいたる所住居して是後親
おをを送りしときくされば慈らあやのハ大乃

及理ふつとしてたうまもあれは必竟ハ佛りもの
又何くを捨つるといふもあやうきごとく
くふりよる
一小童子乃慈乃始古人の工支して亦一垂
きたるころ何り是皆ある亦あれも從
仁義禮智信
おたゆんく義の心を以てまゝめをそれせ
むらのんろあやしおのく深きん深きてれきん
てうちく仁のんろあやしてあや成合せ和合する心

有り和合天地日根万物一体乃理ありて和合
 実の中より万物生じ陰陽の初天地和合五
 穀成就民安全万物也さふ是くは礼始りて
 仁を以て和合成就乃んは恐れさう上一人乃君
 大業を以て成りしむは苦勞も土地和合五穀
 成就民安全と陰陽合和して万物あらんや
 孝出しむやといふあをを初るはせむるれを
 恐れさうりて仁の善物とあり也乃大業は
 以て善事にありて我の善事忽ち天の係ゆ

とて易くも仁善不交始るは後仁の禮も
 乃中より成りぬる。てうちくは孝ありて
 礼を
 うつとよ異語ありけをを合と事ハ
 されしふていりけるを異國へもさる
 てもけをを合わがたさるよの海を味
 ありしそあはれ乃類と考べ
 一ありわとけをを合わがたさるよの海を味
 のんびりては礼ハ善事なりを日より万事を
 ともはれく小徳いてるまを礼と

つゆりとうろくをとりて承る計のてい今く礼あり
礼を以て勤時ハ分りといふを以て小童小海
あつた所とかなど入るゝものをも以て小童小海
むあありとぞ

一かいつりくいかいを世界之智れを以ておふ
子とて九天ハ熱働天始て巡る様として是
らとて徳天忠くま役くふらう勤を勤起りて
ま大儀乃中らうお役始して賢くふの始る
と智志の始りとするくあくとめてしめん

一おつてくといふ成りくまひくてもを折ゆらハ
そりも忠きん信の心信たまはるとか母我あり
身我ありの最初ふして天とぞ始るくま子渾
沌とらる所をむびくといふ信を友乃まきと行
の遊び乃時らうり年終らまを始め終のたぐ
ざらと信といふをいぞとまひくふ日の東より
出始る所を清出るといふ義日乃めらう行
及むらうらうらまにむらまをいそたがざら
と信ら道行するの時らうり考あむらまをくも

終日^{あきひ}より夕日^{ゆふひ}をろふ。といせくとまのくふ
別^{べつ}んたりとて信^{しん}ろんとしそおへふ
烏丸^{くわん}殿^{との}ろふ

唯^{ただ}おたるべしと終^ひつて何^{なに}も
小^こ音^ね子^ことまうしたと変^へろ小^こ音^ねむり

ひと海^{うみ}の浪^{なみ}を鼻^{はな}も赤^{あか}く
岩^{いわ}く空^{そら}をくまろぐらふお母^{おはは}よして
ちやけろさうひもの油^{あぶら}の佛^{ぶつ}の油^{あぶら}やう

と糸^{いと}乃^のつちさや二^にとさや三^におさやさう又^{また}
乃^の松^{まつ}小^こ柳^{やなぎ}やぶれのうねふんびもとぬつや鳥^{とり}
色^{いろ}をゆらやかすれ着^きはゆらやけこらびて
者^{もの}はうらでよのさぬおつちの子^こはやとりら
やそのさねはまらちらんろぼん
なんのこもさけをさめりんくおん
あうとさ一のあーおううんざー
こさうけふおけけけけけ小^こ音^ね子^こ
たましい入^{いれ}おりてせいぜんしてほふかまふ

成るるを深くかきしりてユまをひくあし
もあさかきしりてうたせておの
無とあられまを味の深き事と思
ひしつて他一玉へつとれろそふなすう
どかりあも赤子小童ふりし事んせいの
すうらび一生のけぐれの娘生れてより成長ろ
ほくまでのうれひをまのくふさう恐るべ
き思もあふるべし
世の中ふれあはれ小娘を求むれば社説記を

生れ子の形小智あつて佛小童くさるる
遠くぬふちうの鬼が身あまる形り
一まくにぬきくつむじり紀抄道成寺鐘のゆる
ひまきく然野之年おりれ山伏安弥とく
夜目がめく人も縁家氏時お一人の娘ありて
おさるれ時父をちて曰あり家傳いんぞと
親うつくとおの解りたむれ小娘がつまま
いしとあしとありひ陰く成人るあざら
まぬのまわりを年くほび居し小け傳

何の字もつづね有しに有耐家僧の悔るにり
 つまぞつづねさかく並むぞとひればは僧
 おどろ死そ人ささるゆればおぬけふしておぬ
 娘ぬけやまを知らしるや後を慕ひ逃りて
 日高川にあり水を増りし河をやゆくと後り
 終ふ道成ちあり撞ぐの下に隠し変しを
 大地と成て七まとい出きて尾をふりおてかひと
 ありけが種は湯とありて彼家傳をこり教し
 おしんぬ是別親りりありおぬを云り起りしと

あればりりもおかく懐しむべささるありとかく
 る人皆知るこあれがあれを
 一根性と云ふこいふのありさ終へは死乃
 そのあり根性と云ふは仮し我身不極り宿り
 宿り宿りまされは生ん別るものありあふ子
 あり終死と云ふ夫ふあり色體斗のあり
 土小入ま地りりまこおと生るは怒ふりつと
 因果ありと云極せりあるれば色體どうと
 け方のものありさども是も云ふ夫よりと下り

從ひまらる別うつりありのみふ又五つくだん
地神又代りひやうし別祭れはうつりあり
むふ天神七代日月又新地神五代を
別又新うりあつたれどろむとよらの歌
乃棟を越合せく祭りひこふまあつて
忌しと世ふり習をせさるさうむさう
とがめもあやうにさるは是つねるさう
棟をよし合とを神さるさうむさう
あれはまじうし天神七代地神五代の世

いさうしつりあつて地をり我は自然
山宮どふりあり居させあふさう
大神宮所ありさうふありしむふ
大ひしつりあつて今とふり代あつて
君云乃冥加さうさうと結梅さう
と建く安業を信さうしと神地神の
ふふつりあつてひしつりあつて大
乃いさうしつりあつて今とふり代あつて
何とどし今新島ふさうさうゆめく

阿波や古紙新造のたぐもた紙焼く所苦ありけり
 と御いふおんごのやどくはくを難きこと
 とも後と云肉裏のこころもこのまじき御殿の
 ちかしくらして破壊し及び見ざるしくちか
 しをえいらん何うておれやどふ何れてあさ
 ましこれどもじうの神世乃冬に宿ふ居さる
 むひ夏巢を焼く居させむおりのひゆし
 ぬれびさのこころも何れもても今の所後を
 ちかしくふましくあつえとれ感乃焼く乃は徳を

むれびよくく御いふ味べし何れおびし
 冬穴夏巢乃世の血をすつと毛とくらあを
 まし三つ葉と云天地人三才をこのまじき
 りつて甚難神と云又何くむろん何さし
 何神といふと天神地祇の御事と何ん
 とも神孫と云と云いふと何げふおに
 へびといふと云かやふといふ志うねもつお
 世代令をあのまじき紙ち筆ふけて一生お
 紙一筆紙をまじき紙の糸とありて焼く先

紐乃口さざらふそさうなる故取とひて價三十あ
の紐カホくく亦おせうきつとえんれを生紐怪ひ
むあま

日用勤ふらぬ慎者変

一女日用方の新待ふまづ第一お髪とゆひ
湯をつつひ髪をささうをて化粧をぬりはふ
紐をつける是ま日の所くド災らんをのがう
やううそく方を紐の世を紐の義あり

ワガ方ハ天地乃ものちるがゆつふ大切お中ら苦
ろくろやうもろあ〜三國の時久学乃りう
ま家相の地をうくろく人おを髪とよく
すくべ〜とおへのおんあう 髪うくろく血乃
髪とて血の髪りきりあまうろそ髪ひれ
ま〜さのふ〜紐頭ろくおせう〜
ふふ何家ものふ〜か〜る神乃居ま
あま〜た〜も神ま西坐乃か〜ぶおや〜ふ
とじう〜らう〜やう〜を〜は〜とむす〜

がこれよりうりなり神はくろかきく居あひ
 懸て人なりさへうさされはけふん
 家ふせまれがこのこまひんあつとさけ
 ひをうけるなり人のん中ふくり出
 へざらび自然とかいじくまうかひけ
 かいらの神のさまりむやなりのさ
 いるや懸てあつてかこのふ是をま
 肩より一何とぞいりあうはかいら
 挿をかきくまじりやまだけのこ

てまづらの娘いさざらけり
 されちどめさくはくろかきく居
 まのせりこれのつらあつてあ
 ふさり懸てたづのあひけまが
 挿とりそのあひくそむく
 此信ふ同じや一苦句と
 大將軍乃信ふてまのむが
 とつふらうなりまのむが
 とろくと毛ろ血の解りより

じまがやちやちやをばらしてきくおくりの
 ろを今もくく後ひまつののらちり有り
 ざしそは本居んと節とら家をつけて
 ねどくももらんとるやる又大將軍ハ一
 四海乃じまがやちやとたあめし治めむ官
 せがやうあれよらちやと女りぞん多し
 男よさるん多しと女りくらふあれを
 せしむるんをまぬれしをひをり多し
 後しとら湯をつるひをを清むるを

ちんくくを湯の懸乃後ふ日くふあれた
 あく又くはあれたと湯のむんのぞらふ
 かきけし湯をつらくあつたあつた
 くらう清めろんをききやとあつた
 けうろあつたけしけしけしけし
 ろいさうあつたあつたあつたあつた
 みられたあつたあつたあつたあつた
 ちんくくをけしけしけしけしけし
 らせむの世のあつたあつたあつたあつた

ちひふるげと岩戸乃まきまき神楽を奏し
 まひゆつが神楽何れありあやとおが
 めて彼岩戸をまよひひらせむが世を
 とれぐとなうて人乃面白くとんあを
 故年を引ひく面白く目出なると
 子義を移すかやふたふをやどこふと
 とふありあき故伊勢をたふのかぬ
 して今に伊勢よりいふ名付くう押ま
 だにを唇ふさぬふ古の曰平生人のにびる

色つらき城よりとすうりんまともには
 みほばふけねがれははびるのさつら
 はんぞゆふちひさしむがれをう大けがとす
 う水中に落入り何やまつてあうりたらむ
 すれがたちまらにびるのさつらんむらう
 めてにびらうさかたふ何れか目出なと
 親代をうだねをつけるぞ守りあり

志不の満干城日くにあらる

朔日大遊あきの六ツ時四多と曉の六ツ時四多とんころ

くひるう九ツ時四合と夜の九ツ時四多に干あり

二日朝の六ツ時八多と曉ろ六ツ時八多にみつふなり

ひるの九ツ時八多と干あり

三日中志を朝又ツ時二多と夜又ツ時二多とんころ

ひるの八ツ時二多と夜八ツ時二多と干あり

四日朝ろ五ツ時六多と夜又ツ時六多とふみつるなり

ひるの八ツ時二多と干あり

五日登ろ四ツ時とゆるろ四ツ時ふみほふなり

ひるろ七ツ時とゆるの七ツ時とん干ふなり

六日登の四ツ時四多と夜四ツ時四多とふころなり

ゆるれ七ツ時四多と干あり

七日小しゆひるの四ツ時八多と夜四ツ時八多と満く

ひるろ七ツ時八多と夜ろ七ツ時八多と干あり

八日登九ツ時二多と夜九ツ時二多とふみつるなり

曉ろ六ツ時二多と干あり

九日星の九ツ時六分と暮る九ツ時六分とみちりく
あさる六ツ時六分と晩の六ツ時六分ふ干なり

十日長瀬^{ながせ}ひる乃八ツ時と夜乃八ツ時ふ干なり
しるの四ツ時ふ干なり

十一日ひる乃八ツ時四分ふ干なりあさ乃八ツ時四分と
しるの五ツ時四分ふ干なり

十二日ひるの八ツ時八分と夜乃八ツ時八分にそりく
しるひる乃五ツ時八分ふ干なり

十三日ひる乃七ツ時二分と夜七ツ時二分ふ干なり
しるの四ツ時二分と夜四ツ時二分と干なり

十四日大志^{おほし}ひる乃七ツ時六分と暮七ツ時六分ふ干なり
しる乃四ツ時六分ふ干なり

十五日大^{おほ}は^はひる乃六ツ時と晩乃六ツ時とみちり
ひるの九ツ時と夜乃九ツ時ふ干なり

十六日朝乃六ツ時四分と晩の六ツ時四分ふ干なり
しる乃九ツ時ふ干なり

十七日朝の六ツ時八分と晩乃六ツ時八分とみちり
ひるの九ツ時八分と暮乃九ツ時八分ふ干なり

十八日申志不乾又付二多と扱又付二多にみらるる
よりの八ツ付二多小干なり

十九日乾又付六多と扱又付六多よりのみらるる
よりの八ツ付六多と扱の八ツ付六多小干なり

廿日ひる乃四ツ時と夜乃四ツ時とにみらるるなり
よりの七ツ付小干なり

廿一日是乃四ツ付也多と扱の四ツ付也多とにみらるる
よりの七ツ付也多と扱の七ツ付四多小干なり

廿二日小志不乾に付八多と夜四ツ付八多にみらるる
よりの七ツ付八多小干なり

廿三日小志不乾九ツ付二多小夜九ツ付二多とに備て
あさ乃六ツ付二多と夜六ツ付二多よ干なり

廿四日ひる乃九ツ付六多と夜乃九ツ付六多よ干なり
乾乃六ツ付六多小干なり

廿五日長くかひるれ八ツ付と夜乃八ツ付とにみらるる
あさ五ツ付と扱乃又付と小干なり

廿六日ひるの八ツ付也多と扱乃八ツ付也多よ干なり
あさ乃又付四多小干なり

廿七日ひるの八ツ附八分と夜乃九ツ附八分ふくまらるる
乾乃又ツ附八分と夜又ツ附八分ふくまらるる

廿八日ひる乃七ツ附二分と夜七ツ附二分ふくまらるる
ひる四ツ附二分ふくまらるる

廿九日大瀬ひる乃七ツ附六分と夜七ツ附六分ふくまらるる
ひる乃四ツ附六分と夜四ツ附六分ふくまらるる

晦日乾乃六ツ附と夜の六ツ附とにみくらふらるる
ひる乃九ツ附と夜乃九ツ附とに干まらるる

右瀬の満干に死期を知るに大か生れし時の知死期
小孫乃日扱志を乃と始と満つめとふ又と始と
つめとふ死に志と母就乃産実と養生の能と
ふ養生と天の養生とにふ同何り又病乃種
養生もいふ扁鵲が曰能養生の期を過
と食せざるものハ秘をいそぐとも何り極まる
天地の間水け志を乃さし引小世系を乃たる
引が天地乃呼吸乃出入
雨の降晴ともふは是小志とが天地の息

くらひ家小唯二息ふしてひるさう素三時
 引く三時夜う素三時引く素三とき
 四度なりさねふしうく人る一生屋は素不
 ろもち干が短命延年の境ありうく性
 ありんことわり

翁可かち形し下巻終

公舟官を吐く跋

則ち公舟官を形しと心一舟子の争が友
 貞治翁述作母しある翁く人く公
 舟の翁公孫ありと文を影母しとある
 色をみちる翁す寸ありと翁く翁く一
 字の翁孫く翁翁が一國母しと翁く翁く
 舟の翁やわれ人事の物く舟翁翁を牛
 舟の翁く翁翁翁翁馬とく翁翁舟

此のりは書しそ中條を吐一のぼくを如
を志の報を人女をまの良女かかあを
もつてあをまの良女の良女を人かまを
まの良女と強ておる身はあ一玉の如
を物もあはれをいふ様ありをを誤
かゝる報を人事とていふはある包
空に返丁のりま

中西具壽梓



寛政丁巳年秋八月發兌

東洞院通二條上九町

平安書肆 本邨吉兵衛



